Workshop | Internal Medicine / Proctology

Sat. Nov 21, 2026 10:10 AM - 11:25 AM JST | Sat. Nov 21, 2026 1:10 AM - 2:25 AM UTC | Room 7 (1F 107)

Workshop 8 Constipation Management with a Focus on Defecatory Disorders

司会：野明 俊裕（社会医療法人社団高野会くるめ病院）、本間 祐子（自治医科大学消化器一般移植外科）

[WS8-1] Analysis of Patient-Reported Expressions Suggestive of Defecatory Disorders in Chronic Constipation

*Raita Yano[1] (1. Hiroshima Memorial Hospital)

【背景】慢性便秘症では、排便回数減少型と排便困難型を適切に鑑別し、病態に応じた診療を行うことが重要である。しかし一般診療では排便回数や便性状に着目した診療が中心となり、排便困難型が見逃されている可能性がある。また両型が併存する症例では、さらに鑑別が複雑化する。
【目的】排便機能外来受診患者の問診票および初診時カルテ記載を解析し、排便困難型便秘症を示唆する患者表現の特徴を明らかにすることを目的とした。
【方法】2020年4月から2026年3月までに当院排便機能外来を受診した526例のうち、便秘を主訴とした288例について、後方視的に検討した。便秘症例を、排便回数減少型、排便困難型、両型併存型の3群に分類した。問診票自由記載および初診時カルテ記載から患者表現を抽出し、語句を統一したうえで頻度解析および群間比較を行った。また排便困難型要素を有する症例に特徴的な語句について検討した。
【結果】排便困難型および両型併存型では、「残便感」「出しきれない」「肛門で止まる」「指で出す」「浣腸」「長時間トイレ」などの表現が高頻度に認められた。一方、排便回数減少型では、「何日も出ない」「腹部膨満感」「硬い」「コロコロ便」などの表現が多く認められた。両型併存型も含め、排便困難型要素を有する症例では、排便回数減少のみを呈する症例と比較し、「残便感」「出しきれない」など排便障害を示唆する表現が特徴的であった。
【考察】排便困難型要素を有する便秘症患者には、特徴的な言語表現が認められた。排便困難型便秘の診断や治療には専門性を要するため、残便感や排便時困難感を訴える症例や、通常の投薬では解決できない症例では、排便困難型を念頭に置いて専門外来へ積極的に紹介する、地域の連携が必要であると考える。

©一般社団法人 日本大腸肛門病学会